

九州大学附属図書館蔵『おちくほ』解題と翻刻 (一)

梁, 丹
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/27330>

出版情報 : 文献探究. 50, pp.19-33, 2012-03-31. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

九州大学附属図書館蔵『おちくほ』解題と翻刻(一)

梁丹

解題

九州大学附属図書館に細川文庫旧蔵の一本として、『おちくほ』と題する写本が一冊蔵されている。この写本については、清田正喜氏の論文「落窪物語の伝本」^①において言及があり、次のように述べている。

この細川本は、概して筆写が粗雑であつて、仮名の読み違いや脱落が多く、従つて文意も測り難いところがしばしばみられるのであるが、それだけに粉本の俤を残しておるのであり、所謂「さかしら」を加えることなく、忠実に模写されたことを意味するものでもあるから、本文考勘上にまた興味ある一本といえるのであるが、(下略)また、九条家旧蔵本・本写本・木下長嘯子室本の三本と真淵校本・秋成校訂本とを対校した結果、「木下本は甚だしく細川本と一致している」と指摘している。

『落窪物語』の伝本について概観してみると、本物語の研究は、契沖及びその門流に遡り得るが、本格的な研究に着手したのは、賀茂真淵が最初である。真淵は仕えた田安宗武の命を受けて、遠近に異本を求め、諸本八種を備えて、その門弟と輪読会を行い、その成果として、宝暦十一(一七六一)年冬以前に真淵校合本が成立した^②。その影響下に、寛政六年の木活字本(日本古典文学大系本の底本)、同十一年の

上田秋成校訂本(日本古典全書本の底本)が刊行されるが、特に後者は、流布本としての位置を占める。このように、現存する多くの伝本(写本をも含めて)は、賀茂真淵校合本、或いは版本の影響を受けている。

一方、『落窪物語』の写本は、必ずしも少ないとはいえないが、その多くが近世中期以後の書写で、『伊勢物語』や『源氏物語』の「定家本」のような有力な古写本は伝わっていない。室町中期写とされる九条家旧蔵本(新日本古典文学大系本の底本、日本古典全書の校訂に使用)は、現在知られている最古の写本であるが、近世の本文と大差がなく、秋成校訂本に近似するとされる。近世に入つてからの写本は、奥書がない本が多く、書写年次が不明で、どの本も相当量の本文欠陥を有するようで、柿本獎氏は、「恣意による改訂を含まぬことを評価の基準」として、宮内庁書陵部甲本(角川文庫本・『落窪物語注釈』・新版角川ソフィア文庫本の底本)、実践女子大学本(寛永頃か、日本古典文学全集本・新編日本古典文学全集本の底本)、京都大学図書館蔵近衛本(陽明文庫旧蔵)、(前田)尊経閣文庫本(古典文庫・影印)、蓬左文庫本(近世中期)、刈谷図書館一本の六本を挙げ、比較的古形を伝える「古本」^③と分類される^④。ほかに、木下長嘯子室本(慶長十四年(一六〇九)以前)^⑤、荒木田久老本(日本古典文学大系の校異に一部使用)、

延享三年（一七四六）書写の広島大学蔵本（新潮日本古典集成本の底本）、藤原福雄奥書本（桃園文庫旧蔵、宝暦十一年（一七六一）跋、校注古典叢書本の底本）、（上賀茂）三手文庫本（近世中期の書写）等が、比較的早い時期の写本として注目されている。しかし、本文上からはつきりと別系統と分類できるほどの写本もなく、結局一系統に帰するとされる⁶⁾。このような伝本状況の中、もし清田氏の推測通り、本写本が「江戸時代でもやや早いころの書写」（前掲論文）で、真淵校合本の影響を受けていない写本だとすれば、本文批判等の基礎的研究における重要な一資料になることは間違いないだろう。

ところで、本写本は、巻一と巻二のみの零本で、奥書等もなく、書写年代を知る判断材料に乏しい。全冊一筆で、本文と同筆の書き入れが一箇所見られる。

○まことうき世は行させりとかとか本ノマ、（三六丁ウ4行目）
これは原本を厳密に書写しようとする忠実な書写態度を示す好例と言えよう。

但し一方においては、（a）四丁ウ10行目の、他本に「母きみ我をむかへ」とあるところが、「我きみをむかへ」となっていたり、（b）四丁オ7行目の、他本に「少納言」とあるところが「少将」となっていたり、（c）八丁ウ11行目「おもふたまへしのひつれと」のあと、他本に「さてもえあるましかりければなん」とある十字以上の脱文や、（d）一六丁ウ3行目「いとをかしうあはれにおもほす」のあと、他本に「よろつおほくの給へと御いらへあるへくもおほえず」とある目移りによると思われる約一行の脱落等があり、必ずしも欠陥の少ない良質な写本というわけにはいかない。

また、後人の手によると思われる、朱筆の見せ消ち、補入、注記等

が多数見られる。見せ消ちは「せのまめやかに」（二丁オ12行目）二丁ウ1行目）の「せ」を「も」に直す等、本文を訂正したものと、「り・か・や・御」等、書体が紛らわしいため、正を期して記したのも少なからずある。猶、各和歌の頭には朱の合点（ゝ）が付され、「おちくほ」あるいは「おちくほのきみ」とある所々、朱筆で右側に点線が付されている。

さて、清田氏は「木下本は甚だしく細川本と一致している」と指摘された。本写本と長嘯子室本との比較を、巻一において試みた結果、両者は確かに本文的に相似しているようである。その用例を、語句と脱文とに分け、二・三紹介する。（上段が新大系本本文で（ ）内は所出頁、下段は長嘯子室本と本写本の該当箇所を示す）

（一）語句

○消え失せぬ、わざ（五頁）……両本「きえうせなむ（ん）わざ」

○「御文」として引きいで（十頁）……両本「文とてひきいて」

○あわたたしき口つき（二十頁）……両本「あたらしきくちつき」

（二）脱文

○つくぐくと、いとまのあるまゝに、もの縫ふことを習ひければ、いとをかしげにひねり縫い給ければ、「いとよかめり……」（四頁）

○おとど手づからいましてあけて入り給へれば、くつも取らで、「いづら」とてつかざまりて、さし取らせて……（九四頁）

傍線部は、他本には殆ど存するに對し、両本とも欠している。このように、両本は近接しているようであるが、詳細については全体に渡る更なる精査が必要である。

すでに述べたように、本写本は零本ではあるが、他本との校勘のためにも、翻刻が提供されることは必要であろう。紙幅の都合上、本稿

では巻一の半文弱にあたる(21)丁までを翻刻し、残りは次回以降に譲ることとするが、本写本の翻刻をもとにした他本との比較については、稿を改めて行い予定である。

(注)

- (1) 「国学院雑誌」・五四卷二号・一九五三年七月。
- (2) 詳しくは、寺本直彦「賀茂真淵と一門の落窪物語研究(一)」―桃園文庫旧蔵藤原福雄本・河島氏蔵真淵校合千蔭再校本・寛政六年奥書木活字本三書の關係を通じて」(「平安文学研究」・七七号・一九八七年五月)を参照されたい。
- (3) 片寄正義は、「比較的古型を保存するものを挙げれば九条家本、天和本、季鷹本、絵巻本、木活字本、⁽⁷⁾園本、春海本、文字本等である」とされる。「落窪物語伝本攷―落窪物語の本文について」(「国語国文」・八卷七号・一九三八年七月)
- (4) 柿本奨「落窪物語伝本考(第一部)」(「大阪大学教養部研究集録」(人文・社会科学)・第二十一輯・一九七三年三月)
- (5) 「長本『落窪物語』の書写年時は慶長十四年以前と推定され、現在知られている『落窪物語』写本の書写年時のうち最古のものである。宮内庁書陵部甲の書写推定年時(享保十七年以前)よりさらに百年遡る」伴利昭編『長嘯室本 落窪物語』(和泉書院・二〇〇五年)
- (6) 片寄氏同(②論)参照。

書誌

請求番号 545オ7 九州大学附属図書館蔵細川文庫
巻冊 写本。二卷一冊。卷三・卷四を欠く零本。
書型 大本(縦二九・二糎 横二十・二糎)。袋綴。
外題 表紙中央に「おちくほ」と打付書。
丁数 墨付一一一丁。卷一は五七丁裏まで。五八表より卷二。
行数 前後に遊紙各一丁あり。
料紙 一面十二行書写。一行二〇字前後。
楮紙

凡例

- 一、九州大学附属図書館蔵『おちくほ』を底本とした。
- 一、できるだけ底本の表記通りに翻刻することに努め、漢字、仮名などもすべて原文のままとした。誤謬、脱落と考えられる箇所も、底本の通りにした。
- 一、本文中、見せ消ち、補入、注記等の該当箇所は原文に線を引き、その右に記した。各和歌の冒頭に付された朱の合点は省略し、「おちくほ(なる所)・おちくほのきみ」に付けられた朱筆は、その右側に線を引いて示した。
- 一、底本に句読点、濁点がないが、適宜私に付した。また、会話文と、心中思惟の範囲を「」で明示し、和歌の終わりは「」で示した。
- 一、丁数は頭に()で示し、丁の表裏はオ・ウと表示した。

一、反復記号は、原則として底本のままの表記を心がけたが、漢字の後の「く」、「タ」等は「々」に統一した。

翻刻

(1・オ)

いまはむかし、中納言なる人の、むすめあまたもたまへるおほしき。大君、中君にはむこどりして、にしのたい、ひんがしのたいに、はなぐとしてすませたまふに、三、四のきみ、もきせたまつりたまはんとて、かしづきそしたまふ。また、時々かよひたまふけるわかうどをりばらのきみとて、母もなき御むすめをす。北の方、御こゝろやいかゞおほしけん、つかうまつるごたちの数にだにおぼさず、しん殿のはなちいで、またひとまなる、おちくぼなる所の、ふたまなるになんすませ給ける。「きんだち」ともいはず、「御かた」とはましていはせたまふべくもあらず。名をつかんとすれば、さすがにおとゞのおぼす心

(1・ウ)

あるべしとつゝみ給ひて、「おちくぼのきみといへ」とのたまへば、人々もさいふ。おとゞもちごよりらうたくやおぼしつかずなりにけん、まして北の方の御まゝにて、わりなき事おほかりけり。はかぐしき人もなく、めのともなかりけり。たゞおやおほしける時よりつかひつけたるわらはの、されたる女ぞ、うし

ろみとつけてつかいたまひける、あはれにおもひかはして、かたときはなれず。さるは、この君のかたちは、かくかしづき給ふ御むすめどもよりもおとるまじけれども、いでまじらふ事もなくて、あるものとしる人もなし。やうくものおもひ知るまゝに、世の中のあはれにこゝろうきをのみおぼされければ、かくのみぞうちなげく。

(2・オ)

日にそへてうさのみまさる世の中にこゝろづくしの身をいかにせん」といひて、いとうものおもひしりたるさまにて、大かたのこゝろさまさどくて、ことなどもならはす人あらば、いとよくしつべけれども、たれかはをしへん。母君の、六七ばかりにておほしけるに、ならはしをい給けるまゝに、しやうの琴をよにおかしくひき給ふければ、むかひばらの三郎君、十ばかりなるに、琴こゝろにいれたりとて、「これにならはせ」と北の方のたまへば、ときぐをしふ。つくぐと、いとまのあるまゝに、物ぬふことをならひければ、「いとよかめり。ことなるかほかたちなき人はせのまめ

(2・ウ)

やかにならひぞよき」。ふたりのむこのさうぞく、いさゝかななるひまなく、かきあひぬはせたまへば、しばしこそものいそがしかりしか、夜もいもねずぬはず。いさゝかおそき時は、「かばかりの事をだに、うけかくにし給ふは、なにをやくにせんとならん」

とせめたまへば、打なげきて、「いかでなをきえう
せなむわざもがな」となげく。三のきみに御も
きせたてまつりたまひて、やがて蔵人少将あはせ
たてまつり給ひて、いたわりたまふ事かぎりなし。
おちくぼの君、ましていとまなく、くるしき事ま
さる。わかくめでたき人はおほく、かやうのまめわざ
する人やすくなかりけん、あなづりやすくて、いとわび

(3・オ)

しければ、うちなきてぬふまゝに、

世のなかにいかであらじとおもへどもかなはぬ
ものはうき身なりけり」。うしろみといふは、かみ
ながくおもしげなれば、三のきみの方にたゞめし
にめしいづ。うしろみ、いとほひなくかなしとおもひ
て、「わがきみにつかうまつらむとおもひてこそ、した
しき人のむかふるにもまからざりつれ。なにのよし
にか、こと君どりはし奉らん」となげば、きみ、「なにか。
おなじ所にすまなかぎりは、おなじ事とみてん。
きぬなどのみぐるしかりつるに、中々うれしと
なんみる」とのたまふ。げにいたはりたまふことめ
たければ、あはれにこゝろぼそげにておはする

(3・ウ)

をまもらへならひて、いと心ぐるしければ、つねに
いりぬれば、さいなむ事かぎりなし。「おちくぼの
きみも、これをいまさへよびこめたまふ事」とは
らだゝれ給へば、こゝろのどかにものがたりもせず。

うしろみといふ名いとびんなしとて、「あこき」と
つけ給ふ。かゝるほとりに、蔵人の少将の御かたなる
こたちわきとて、いとされたるもの、此あこきに
ふみかよはして、のちいみじうおもひてすむ。かたみ
にへだてなく物がたりしけるつゐで、此わが
君の御事をかたりて、北の方の御こゝろのあやし
うて、あはれにてすませたてまつりたまふ事、
さるは、御心ばへ、御かたちのおはしますやうとかた

(4・オ)

る。打なきつゝ、「おもふやうなる人にぬすませたてま
つらん」と明暮、「あたらしもの」とおもふ。このたちわき
のめおやは、左大将ときこえける御むす子、右近の少将に
ておはしけるなんやしなひたてまつりける。まだ
めもおはせで、よき人のむすめなど人にかたらせ
て、とひきゝたまふつゐで、たちわき、おちくぼ
のきみのうへをかたりきこえければ、少将、みゝとまり
て、しづかなるひとまなるに、こまかにかたらせて、「あはれ、
いかにおもふらん。さるはわかうどをりはらなりかし。
我にかれみそかにあはせよ」とのたまへば、「たゞいま、
世にもおぼしかけたまはじ。今かくなんともものし
侍らん」と申せば、「いれにいれよかし。はなれてはた

(4・ウ)

すむなれば」とのたまひて、たちわき、あこきに、かく
なん、とかたれば、「たゞいまさやうの事かけてもお
ぼしたらぬうちに、いみじき色ごのみときゝたて

まつりしものを」ともてはなれていらふるを、たてわき
うらむれば、「よし、いま御けしきみん」といふ。この御かた
のつゞきなるむさしふたま、さうしにはえたりけ
れば、おなじやうなる所はかたじけなしとて、おち
くぼひとまをしつらひてなんふしける。八月朔日比
なるべし。きみひとりふして、いもねられぬまゝに、
我きみ、をむかへたまへ。いとわびし」といひつゝ、
われに露あはれをかけたちかへりともを
を消ようきはなれなむ」。こころなくさめに、いと

(5・オ)

かひなし。つとめて、物語してのつゝるでに、「これがかく
申はいかゞ侍らん。かくてのみはいかゞはしはてさせたま
わん」といふに、いらへもせず、いひわづらひてあたるほどに、
「三のきみの御手水まいれ」とてめさればたちぬ。心の
うちには、とありともかゝりともよき事は有なんや、
めおやのおはせぬに、さいわいなき身としりて、いかで
しなん、とおもふこゝろふかし。あまになりても、とのゝ
屋はなるまじければ、たゞきえうせなんわざも
がな、とおもはず。たちわき、大將殿にまいりたれば、
「いかにぞ、かのことは」「いひ侍りし也。しかくなん申す。
まことにいとほるけくなり。かやうのすぢは、おやある
人はそれこそともかくもいそげ、おとゞも北のかたに

(5・ウ)

とりこめられて、よもしたまはじ」と申せば、「され
ばこそ、いれよいれよとは。むごどらるゝも、いとほし

たなき心地すべし。らうたうなをおぼへば、こゝに
むかへてむ。さらずは、あなかまとてもやみなんかし」
とのたまへば、「そのほどの御さだめ、よくうけ給て
なん。つかうまつるべか也」といへば、少將、「みてこそは
さだむべかなれ。そらにはいかでかは。まめやかにはなを
たばかれ。よにふとはわすれじ」とのたまへば、たちわき、
『ふと』ぞあぢきなきものなゝる」と申せば、きみうちわ
らひたまひて、『ながく』といはんとしつるを、いひたがへ
られぬるぞや」など打わらひたまひて、「これを」とて、
御ふみたまへば、しぶくにとりて、あこぎに、「ふみ」と

(6・オ)

て引いでたれば「あなみぐるし。なにしにぞと。よし
なき事はきこえて」といへば、「なを御かへりせさせたま
へりし。よにあしき事にはあらじ」といへば、とりて
まいりて、「かのきこえ侍りし御ふみ」とて奉れば、「なに
しに。うへもきい給ひては、『よし』とはの給ひてんや」と
のたまひて、「さてあらぬときは、よくやはきこえたまひ
てや。うへの御こゝろなつゝみきこえたまひそ」といへど、
いらへもしたまはず。あこぎ、御ふみをしそくさして
みれば、たゞかくのみ有。

きみありときくにこゝろをつくばねのみね

ど恋しきなけきをぞする」「おかしの御手や」と

ひとりごちゐたれど、かひなげなる御けしきなれば、

(6・ウ)

をしまきて御くしのはこに入て立ぬ。たちはき、

「いかにぞ。御らんじつや」「いで、まだいらへをだにせさせたまはざりつれば、をきてたちぬ」といへば、「いでや。かくておはしますよりはよからん。われらがためにもおもふやうにて」といへば、「いでや。御ころのたのもしげにおはせば、なかはさも」といふ。つとめて、おとど、ひのどのにおはしけるまゝに、おちくぼをさしのぞいてみたまへば、なりのいとあしくて、さすがにかみのいとうつくしげにてかゝりてゐたるを、あはれとやみ給ひけん、「みなりいとあし。あはれとはみ奉れど、まつやんごとなき子どもの事おはするほどに、えころしらぬ也。よかるべき事あらば、ころもしたまへ。かく(7・オ)

てのみいまするがいとおしや」とのたまへど、はづかしくてももの申されず。帰り給ひて、北の方に、「おちくぼをさしのぞきたりつれば、いとたのみすくなげなる。白きあわせひとつをこそきてゐたりつれ。子どもふるぎぬやある。きせたまへ。夜るいかにさむからん」とのたまへば、きたのかた、「つねにきせ奉れど、ほらかし給ふにや、あくばかりも、えきつき給はぬ」と申給へば、「あなうたてや。おやにとくおかれて、ころもはかぐしからずぞあらんかし」といらへたまふ。むこの少将の君のうへのはかま、ぬわせにをこせたまふとて、「これはいつよりもよくぬわれよ。ろくにきぬきせたまつらん」とのたまへるをきくに、いみじき事かぎりなし。いと

(7・ウ)

とくきよげにぬひてたまへれば、北の方、よしとおもひて、のがきたるあやのはりわたのなへたるをきせせたまへば、かぜはたゞひやゝかになるまゝに、いかにせましとおもふに、すこしうれしとおもふぞ、ころのくしすぎたるにや。此むこのきみは、あしき事をもかしかましくいひ、よき事をばけちえんにほむる心なれば、「此そうぞくどもをいとよし。よくぬいおほせたり」とほむれば、ごたち、かくなんと、北の方にきこゆれば、「あなかま、おちくぼにきかすな。心おごりせんものぞ。かやうのものは、くせさせてあるぞよき。それをさいあひにて、人にもちいられんものぞ」との給へば、ごたち、「いとみじげにもたまふかな。あたら君(8・オ)

を」と、しのびていふも有けんかし。かくて、少将、いひそめ給ひてければ、また御ふみ、すゝきにさしてあり。ほにいでゝいふかひあらばはなすゝきそよともかぜにうちなびかなん。御かへりなし。時雨いたくする日、「さもきゝたてまつりしほどより、物おぼししらざりけり」とて、くもまなきしぐれの秋は人こふるころのうちもかきくらしけり。御帰もなし。また、あまの河雲のかけはしいかにしてふみゝるばかりわたしたつたへん。ひゞにあらねど、たえずいひわたりたまへど、たえて御かへりなし。「いみじうものゝつゝましきうちに、かやうのふみもまだみしらざり

(8・ウ)

ければ、いかにいふともしらぬにやあらん。ものおもひしりげにきくを、などかは、はかなきへんじをだにたえてなき」と、たちわきのたまへば、「しらず。

きたのかたいみじく心あしくて、わがゆるさざらん事を、露ばかりもしてはいみじからむ、とあけくれおぼひたるに、をじつゝみたまへる、となんきゝ侍る」と申せば、「我をみそかに」とひわたり給へば、わがきみの御事をいなびがたくやありけん、いかでとみありく。十日ばかりおとづれたまわで、おもひいでゝの給へり。「ひ比は、

かきたえてやみやしなましつらさのみいとゞ

いとゞますだの池の水くさ」。おもふたまへしのびつれど、人しれず、人わろく」とあれば、たちわき、「此たび

(9・オ)

だに御かへりきこえたまへ。しかくゝなんのたまひて、『こゝろにいれぬぞ』とさいなむ」といへば、あこき、『まだいふらんやうもしらず』とて、いとかたげにおもほしたる物を」とて、入てみ奉れど、中の君の御おとこの右中弁とみにておたまふ、うへのきぬぬひたまふ

ほどにて、御帰なし。少将、げにいひしらぬにやあらんとおもへど、いとこゝろふかき御こゝろも、きゝしみにければ、さるさまやふさはしかりけん、「たちわき、おそしゝ」とせめ給へど、御かたゝくすみたまひて、いと人さしがしきほどなれば、さるべきをりもなくておもひありくほどに、この殿、ふるき御くわんはたしに、いしやまに

まふでたまふに、御ともにしたひきこゆるまゝに、も

(9・ウ)

ておはすれば、女さへとゞまらんことをはちとおもひてまふづるに、おちくぼのきみ、かぞへのうちにだにいらねば、弁の御かた、「をちくぼのきみおはせ。ひとりとまりたまはんがいとおしきこと」と申給へば、「さて、それがいつかありきたる。たびにては、ぬいものやあらんとする。なをありかせそめじ。うちはめてをきたるぞよき」とて、おもひかけでやみたまひぬ。あこきは三の御方人にて、いときなくさうぞかせていておはするに、をのがきみのたゞひとりおはするに、いみじくおもひて、「にはかにけがれ侍ぬ」と申てとまれば、「よにさもあらじ。かのおちくぼの君のひとりおはするを

おもひて、いふなめり」とはらたてば、「いとわりなき

(10・オ)

事。よくはべなり。さぶらへとあらばまいらん。かくおかしきことをみじとおもふ人は有なんや。女だにしたひまいる道にこそあめれ」といへば、げにさやおもひけん、はしたわらはのあるにさうぞきかへさせて、とゞめ給ふ。のゝしりて出たまひぬれば、かひすみてこゝろぼそげなれど、わがきみとうちかたらひてあたるほどに、たちわきがもとより、「御ともにまいりたまはずときゝくは、まことにや。さあらばまいらん」といひたれば、「御かたのなやましくおはして、とまらせたまひぬれば、なにしにかは。いとつれかゝなるをなんなぐさめつべくておはせ。あ

りとのたまひしゑ、かならずもて」「おほく候へ。きみ
おはしかよはゞ、み給ひてんかし」といへる成けり。たち

(10・ウ)

わき、このふみをやがて少将の君にみせたてまつれば、

「これやこれなりがめので。いとうこそかこたけれ。よき折
にこそは有けれ。いきてたばかれ」とのたまふ。「絵一卷
おろしたまはらん」と申せば、きみ、「かのいひけんやう
ならむをりこそみせめ」とのたまへば、「さも侍りぬ
べき折にこそは侍めれ」。うちわらひなて、御かたに
おはして、白きしきしに、こぬひさしく口すくめたる
かたをたまひて、「めし侍ば、

つれなきをうしとおもひつる人はよにゑ

みせじとこそおもひがほなれ」。おさな」とかいたまへ
れば、いづとて、おやに、「おかしきさまならん物、ひとへ
ぶくろしておいたまへれ。今たゞいまどとりにてたて

(11・オ)

まつらん」といひをきていぬ。あこきよびいでたれば、

「いつこへは」といへば、「くは。この御ふみみせ奉りたまへ」
「いで、そらごとこそあらめ」といへど、とりていぬ。君、
いとつれづれなるおりにて、みたまふて、「多やきこえ
つる」とのたまへば、「たちわきがもとに、しかくいひて
侍りぬるを御覧じつけたるにこそ侍めり」と

いへば、「うたて、心な、とみへられたるやうにこそ。人に
しられぬ人はうらむなるこそよけれ」とて、もの
しげにおもほしたち。たちわきよべばいぬ。物語し

て、「誰々かとまり給へる」とさりげなくてあない
とふ。「いとさうぐしや。女どものみもとにくだ物と
りにやらん」とて、「なにもあらんもの給へ」といひに

(11・ウ)

やりたれば、ゑぶくろふたつして、おかしきさまに
して入たり。いまひとつの大きやかなるには、さまぐ
のくだ物、色々のもちぬ、うすきこきいれて、かみへだ
てゝやいごめ入て、「こゝにてだにあやしく、あたらし
きくちつきなれば、たびにてさへいかに。はづかしう。
此やいごめはつゆといふらん人にもしたまへ」といへり。
さうぐしげなるけしきをみて、いかではかなき心
ざしをみせん、とおもひくしたるなりけり。女みて、
「いで、あやし。まめくだものや。けしからず。そこにした
まへるにこそあはれ」とえんずれば、たちわきうち
わらひて、「しらす。まろはかやうにみぐるしげにはし
てんや。おんなどものみさかしらなめり。つゆ、これ

(12・オ)

とりてかくしてよ」とて、やりつ。ふたりふして、かた
みに、きみの御こゝろばへどもをかたる。こよひ雨ふれ
ば、よもおはせじとて、打たゆみてふしたり。女君、人
なきおりにて、琴いとおかしうなつかしうひきふし
たまへり。たちわき、おかしときゝて、「かゝるわざした
まへるは」といへば、「さかし。こうへの、六さいにおはせし時
より、をしへ奉り給へるぞ」といふほどに、少将、いとしの
びておはしにけり。人をいれ給ひて、「きこゆべき

事ありてなん。たちいでたまへ」といはすれば、たちわき心へて、おはしにけるとおもひて、あわたしくて、「たゞいまたいめんす」とていでぬれば、あこき御前にまいりぬ。少将、「いかに。かゝる雨にきたるを、いたづ

(12・ウ)

らにてかへすな」とのたまへば、たちわき、「まづ御せうそこをたまはせて。おとなくともおはしましにけるかな。

人の御こゝろもしらず。いとかたき事に侍」と申せば、少将、「いといたくなすくたちぞ」とて、しとゝうちたまへば、「さはれ、おりさせたまへ」とて、もろともに入たまへ。

御車は、「まだくらきに」とてかへしつ。我ざうしのやり戸口にしばしゐて、あるべき事をきこゆ。人

ずくななる折なれば、こゝろやすしとて、「まづかいまみをせさせよ」とのたまへば、「しばし。心おとりもぞせさせたまふ、ものいみの姫君のやうならば」ときこゆれば、「かさもとりあへで、袖をかつきてかへるばかり」とわらひたまふ。かうしのはさまに入たてまつりて、

(13・オ)

るすの殿の人やみつくる、とおのれもしばしすのこにをり。君みたまへば、きえぬべく火ともしたち。

木丁、びやうぶことになれば、よくみゆ。むかひゐたるは、あこきなめりとみゆる。やうだい、かしらつきおかしげにて、しろききぬ、うへにつややかなるかいねりのあこめきたり。そひふしたる人有。君なるべし。白きぬのなへたるとみゆるきて、かいねりのはり

わたなるべし、こしよりしもにひきかけて、そばみてあれば、かほはみえず。かしらつき、かみのかゝりば、おかしげなり、とみるほどに火きえぬ。くちをしとおもへど、つゐには、とおぼしなす。「あなぐらのわざや。人ありといひつるを、はや、いね」といふ聲もいといみじくあてはか

(13・ウ)

なり。「人にあひにまかりぬるうちに、おまへに候ん。大かたに人なければ、おそろしくおはしまさんものぞ」といへば、「なをはや。おそろしさは、めなれたれば」と

いふ。きみ、いで給へれば、「いかゞ。御をくりつかうまつるべき。御かきは」といへば、「めを思へばいたくかたひく」とわらひ

たまふ。こゝろのうちには、きぬどもぞなへためる、はづかしと思はんものぞ、とおもほしけれど、「はや、その人よびいでゝねよ」とのたまへば、ぎうしにゆきてよばすれど、「こよひはおまへにさぶらふ。はやうさぶらひにまれ、おはしね」といへば、「只今人のいひつる事きこえむ。たゞあからさまにいで給へ」ときこえさすれば、「なに事ぞとき。かしましや」とて、やり戸をよし

(14・オ)

あけてさしいでたれば、たちはきとらへて、「あめふる夜なめり。ひとりなね」「そよ。ことなかり」といへど、しみてゆきてふしぬ。ものもいはで、ねいらねば、ね入たるさまをつくりてふせり。女きみ、なをねいらねば、ことをふしながらまさぐりつゝ

なべて世のうくなる時は身かくさんいはほ

の中のすみかもとめて」といひて、とみにねいるまじければ、また人はなかりつとおもひて、かうしを、きはしにて、いとよはなちて、をしあげて入ぬるに、いとおそろしくてをきあがるほどに、ふとよりて

とらへ給ふ。あこき、かうしあげらるゝ音をきゝて、いかならんとおどろきまどひておくれれば、たちわき、

(14・ウ)

さらにおこさず。「こはなぞ。みかうしのなりつるを、なぞとみん」といへば、「いぬならん、ねずみならんにおどろき給ふぞ」といへば、「なでうことぞ。したるやう

のあればいふか」といへば、「何わざかせん。ねなん」といできてふしたれば、「あな侘し。あなうたて」と、

いとおしくてはらだてど、うゝきもせずいだき

こめられて、かひもなし。少将、とらへながら、さうぞくときてふし給ぬ。女、おそろしうわびしくて、

わなゝきなく。少将、「いとこゝろうくおぼしたるに、

世の中のあはれなる事もきこえん、いはほの中もとめてたてまつらんとてこそ」とのたまへば、

たれならんとおもふよりも、きぬどものいとあやし

(15・オ)

う、はかまのいとわろびすぎたるもおもふに、たゞ

いまも、しぬるものにもがな、となくさま、いといみじげなるけしきなれば、わづらはしくおぼへて、物も

いはでそいたり。あこきがふしたる所もちか

ければ、ないたまふこゑもほのかにきこゆれば、

さればよ、と思ひてまどひおくるも、はらにおこせねば、「我きみをいかにしなし奉りて、かくはするぞや。あやしとはおもひつ。いとあひぎやうなかりけるこゝろもたりけるものかな」とてはらだち、かなぐりて

おくれれば、たちわきわらふ。「ことこまかにしらぬ事も、たゞおほせにおほせ給こそ。そへにこの時のぬす

人いたらんやは。男にこそおはすらめ。いまはまいりた

(15・ウ)

まひても、かひあらじ」といへば、「いで、なをつれなくものないひそ。たれとだにいへ。いみじきわ

ざかな。いかにおほしまどふらん」とてなけば、「あなわらわげや」とわらふ。ねたき事そひて、あひおほさ

ざりける人に見えけることゝ、いとつらくおもひたれば、

こゝろぐるしうて、「まことに、少将のきみなんものゝ給はんとおはしたりつるを、いかならんことならん。

あなかま。とてもかくても御すくせぞあらむ」と

いふを、「いとよし。けしきをだにしらせねど、きみはこゝろあはせたりとおぼさんが侘し

き事ぞ」「なにしにかよひこゝにきつらん」と

うらむれば、「しらぬけしきをだにみ給はずや

(16・オ)

有。はらだちうらみ給」と、はらだゝせもあへず、たわぶれしたり。男君、「いとかうしもおぼひたる

か、いかなる人数にはあらねど、またいとかうまでは、

なはい給ふほどにあらずとおぼゆる。たびくの

ふみ、『みつ』とだにのたまはざりしに、びんなきこととみてき。こえでもあらばやおもひしかども、きこえそめ奉りてのち、いとあはれにおぼえたまひしかば、かくにくまれたてまつるべきすくせのある也けり、とおもふ給ふへらるれば、うきもうからずのみなん」とかいらせ奉りて、ふし給へれば、女、しぬべきこゝちし給。ひとへぎぬはなし。はかまひとつきて、ところぐあらはに、身につきたるをすふ

(16・ウ)

に、いとみじとはおろか也。なみだよりもあけにしとどになり。男君もそのけしきをほとみたまひて、いとをしうあはれにおもほす。はづかしきに、あこきをいとつらしとおもふ。からうじてあけにけり。鳥の鳴聲すれば、男君、

「きみがかくなきあかすだに悲しきに

いとうらめしき鳥のこゑかな。いらへときくははし給へ。御こゑきかずは、いとよづかぬこゝちすべき」とのたまへば、からうじて、あるかもあらずいらふ。

人こゝろうきにはとりにたぐへつゝなくよりほかのこまはきかせじ」といふきみ、いとらうたければ、少将のきみ、なをざりにおもひしを、

(17・オ)

まめやかにおもふべし。「御車いてまいりたり」といふをききて、たちわき、あこきを、「まいりて申給へ」といへば、「よべはまいらで、まいらん、げにまるが

しりたることゝこそおもほさめ。はぢきたなく、人うとませ奉る事」とえんずる、いはけなきものからおかしければ、たちわき、うちわらひて、

「きみことみたまはゞ、まる思はんかし」といひて、かうしのもとによりてこはづくれば、少将おきんふに、女のきぬをひきゝせ給ふに、ひとへもなく、とつめたければ、ひとつをぬぎすべしてをきて出たまふ。女君、いとほづかしき事がぎりなし。あこき、あひなくいと申しけれど、さてはいりぬ

(17・ウ)

たらねば、まいりてみれば、まだふしたまへり。いかでいひいでんとおもふほどに、たちわきのも君のも有。たちはきには、「夜一よ、しらぬことにより、うちひき給ひつるこそ、いとわりなかりつれ。御ためにすこしにてもおろかならん時には、まいらじ。ましていかなるめみせ給はんと、御こゝろばせかな。おまへにも、いかによくもあらけるものかなとおぼし。のたまはすらん、とおもふたまふれば、このみやづかひいとわづらはしく侍れど、御ふみ侍めり。御返きこえいでたまへ。この世の中は、さるべきぞ。何かおもほす」といへり。もてまいりて、「こゝに御ふみ侍めりよべ、いとあやしく、おもひかけずてふし侍りし

(18・オ)

ほどに、はかなく明にけり。きこえさすとも、あらがふとぞ、をしはからせ給らむ」と、「をし斗ことほりなれ

ど、このけしきをだにみて侍らば」と、萬にちかひ
ゐたれど、いらへもせず、をきもあがりたまはねば、
「なを、しりて侍とおもほすにこそ侍めり。心うく、
こゝらの年比つかうまつり侍りて、かくうしろめ
たき事はし侍りなんや。ひとりおはしまさ
むをおもふたまへて、おかしき御ともにもまいり
侍らずなりにしかひなく、かゝる事をきかせ給はず、
びなき御けしきならば、さぶらはんもいとくおしう
侍り。いづちもくまかりなん」とて打なけば、きみ、
いとくおしうて、「そこにしりたりとおもはず。いと

(18・ウ)

あさましう、おもひもかけぬことなれば、いかゝ心うく
おもふうちに、いとみじけなるはかま、ありさまにて
みへぬこそ、いといはんかたなくわびしけれ。こうへ
おはしましかば、なにごとにつけてもかくうきめ
みせましや」とて、いみじうなき給へば、「げに、ことは
りに侍れど、いみじきまゝはといへど、北のかたの
御こゝろのいみじうあさましきよしは、さきくも
きかせたまへれば、さこそはおぼすらめ。たゞ御心だに
たのみ奉りぬべくは、いかにうれしからん」「それこそは
まして。ことやうにあらん人をみて、こゝろとまりて
おもふ人はありなんや。ものゝきこえあらば、北の方
いかにのたまはん。『わがいはざらん人の事をだにし

(19・オ)

たらば、こゝにもおひたらじ』とのたまひしものを」

とて、いみじとおもひたまへれば、「されば、中々おもひ
はなれたてまつりたらんが、よからん。かくていはれ
おはしますは、いづくの世にぞ。もしよくもならせた
まはど、てもよにおはしまさじ。かくて補入こめすて
奉り給ひてつかひ奉りたまはんの心いとふかくて、
あらせきこえたまふにはあらずや」と、いとおとなく
しういひぬたり。「御返は」とこへば、「はやう御ふみも御らん
ぜよ。いまは、おぼしなげくともかひあらじ」とて、
御ふみひろげて奉れば、うつぶしながらみ給ふ
ば、たゞかくのみあり。

(19・ウ)

いかなれやむかしおもひしほどよりは今の
まおもふことのまさるは」とありけれど、「いと心地
あし」とて御返じなし。あこき、返事かく。「いで
や、こゝろづきなく。こはなにごとぞ。よべのこゝろはかぎ
りなくあいなく、こゝろづきなく、はらぎたなし
とみてしかば、いまゆくさきもたのもしげなく
なん。おまへには、いとなやましげにて、まだをきさせ
たまはざめれば、御ふみもさながらなん。いとこそこゝろ
ぐるしけれ、御けしきをみるは」といへり。少将のきみ
に、かくなん、ときこゆれば、我をいともものしとおもは
むやは、たゞかのきぬどもをいとみじとおもひたり
つるなごりならむ、とあはれにおぼす。ひるにまた
御ふみかきたまふ。「などか、いまだに、いとわりなげ

(20・オ)

なる御けしきの、いとおしきは。ふたりだに、

恋しくもおもほゆるかなさゝがにのいとゝ

けずのみみゆるけしきに。「ことはりな」とあり。たちわきがふみ、「こたびだに御かへりなくば、びんなかりなむ。いまはたゞおぼせかし。御心はいとながげになんみ奉のたまふにする」といへり。あこき、「なをこたみは」といへども、

いかにおもひてたまはらんと思ふ。はづかしう、つゝましく、わづらはしくて、返事かくべくもおぼへねば、たゞきぬをひきかづきてふしたり。きこえわづらひて、あこき、かへりことかく。「御ふみは御覽じつれど、まめやかにくるしげなる御けしきにてなん。御かへり事も。さていとながげにはなか。いつのほどに

(20・ウ)

かはみじかさもみえ給はん。又たのもしげなくとも、うしろやすくのたまふらん」とかきてやりつ。

たちわき、みせ奉りたれば、「いみじくされて、ものよくいふべきもの哉。むげにははづかしとおもひたりつるに、けのゝぼりたらん」とほゝゑみてのたまふ。

さて、あこき、たゞひとりして、いひあはずべき人もなければ、心ひとつをちぢになして立あつゝ、おまし所のちりはらひ、そゝくりて、びやうぶ、きてうなければ、しつらひなさんかたもなければ、君はものもおぼへで、ふし給へるを、おましなをさんとひきおこしたてまつれば、おもてあかみて、げにくるしげなるまで、御めもなきはなれたまへり。いとおしうあはれにて、

(21・オ)

「御ぐしかきくだし給へ」とおとなしくしうつくろへど、「こゝちあし」とてたゞふしにふしぬ。この君は、いさゝかよき御てうどもたまへりける、はゞきみの御もの成けり、かゞみなどなんまめやかにうつくしげなりける、「これをだにも、もたまへらざらましかば」といひて、かきのごひてまくらがみにをく。おとなになり、わらはになり、一人いそぎくらしつ。いまはおはしぬらんとて、「かたじけなくとも、まだいたう身にもなれ侍らず。いとおしう、よべさてみへ奉り給ひけん」とて、をのがはかまの、ふたゝびばかりきていとよきげなる、とのゐものにてもたりける、ひとつをいとしのびてたてまつるとても、「いとなれくしう侍

(21・ウ)

れども、またみしる人の侍らばこそあらめ。いかゞはせん」といへど、かつははづかしけれど、こよひさへおなじやうにてみえん事を、わりなくおもひつるにし、あはれにてき給ひつ。「たき物は御もぎにたまはせたりしも、ゆめばかりつゝみをきて侍り」とて、いとかうばしうたきにほはず。三しやくの御木下ひとつぞいるべかめる、いかゞせん、たれにからまし、御とのゐものもいとうすきを思ひまはして、おぼの殿ばら、宮づかへしけるが、いまはいつみのかみのめてゐたりけるがり、ふみやる。「とみなる事にて、とゞめ侍りぬ。はづかしき人の、かたたがへにぎうし

ものし給ふべきに、木丁ひとつ。(下略)

〈付記〉

本稿の資料の閲覧及び翻刻掲載の御許可を賜りました九州大学附属図書館に、深甚の謝意を申し上げます。

(りょう たん・本学大学院博士後期課程)